

1) 「初期大乘經典は…『創作』物である。……それは歴史的現実である¹⁾」故に、大乘經典研究は、当然、仏には非らざる一人の經作者がいかなる状況下であって、何を、誰に向かつて主張しているのかの究明であらねばならない。この立場から、〈阿弥陀經〉と『大阿弥陀經』について、「直接原典に当たり、虚心に原典を讀²⁾」んで、その所説内容を少しく検討した所を述べる。

2) 〈阿弥陀經〉は、冒頭「ここより西方十万億の仏国土を過ぎて、極樂と名付ける世界あり。そこにアミターユス（無量壽）仏が今、生きて在り、……説法している」と語って、娑婆世界が今、〈仏滅後〉、仏不在の下で、「人々が今一度仏陀に会い、その教えを受け³⁾」ようとするなら、極樂世界への「往（きて、そこに）生（まれる）」より他に方策はないと主張する。その往生の主因は今生における大善根であり、助縁として、一日乃至七日、無量壽仏を作意すべしと言う。かくて、臨終に無量壽仏は彼の前に立ち、彼は死後、そこに往生すると説く。原始仏教は、一般民衆に「施（神々やブツダ、ジナ等の聖人、出家者などへの礼拝供養）、戒（不殺生など五戒の遵守）、生天（施・戒をもって得た善根功德に依って現世安穩と後に天界に生まれる）」論を説いたが、本經は、「生天」を「無量壽仏国土への往生」に替えた一般民衆向けの宗教であって、悟りを求める仏教とは言い難く、インドでもヒンドゥー教文化の希薄な地での成立を窺わせる。

3) 『大阿弥陀經』は〔A〕アミターバ（無量光）仏とその本生たる法蔵菩薩説話を説く部分⁴⁾では、「來生」（十方世界の衆生が無量光仏国土にやって来て、そこに生まれる）を言うが、〔B〕後の部分は「往生」（娑婆世界の衆生が無量光仏国土に往き生まれる）を説き、明確に二分される。〔A〕は、無量光仏の三世十方諸仏中「最尊」なることを頭中光明の無極によって明かし、それを〈阿弥陀經〉を下敷きにした法蔵菩薩説話⁵⁾によって根拠づける。ここから〔A〕の無量光仏は、仏教が西に出てゾロアスター教の光明の神アフラ・マズダに遭遇して、それに対抗して創出した新しい仏であり、その仏国土の樂園たることをアピールして、在地の民衆を仏教に惹き付けんとしたものである。

〔B〕は、〈阿弥陀經〉の絵解きの解説版で、一般民衆に現世での、布施などの「作諸善」による「後世得其福」を信じての「念欲往生阿弥陀仏国」を説くもので、「施・戒・生天」論の仏教的改訂論であり、五惡段で「齋戒清淨一日一夜者 勝於在阿弥陀仏国作善百歳」とまで述べて、今生での作善、積功累徳を強調する。これは、インドとは全く異質の宗教圏の中国に進出せんとする、出家の宗教たる仏教の魁をなすが故である。

キー・ワード 「生天」に替わる「往生」、アフラ・マズダ神 v s アミターバ仏、
中国仏教としての浄土教 (注省略)